

大学生が回想した親子間葛藤

－ 面接調査より －

Parent-Child Conflict Recollected by University Students:
An Interview Survey

渡 邊 賢 二

(皇學館大学教育学部教育学科)

I 問題・目的

児童期から青年期になると、身体の変化（身体イメージ）、性的成熟（異性に対する興味・関心）、自我の発見などの自己の変化、また小学校から中学校への学校移行による友人関係の変化、教科学習の困難さ、教科担任制度、部活動などの環境の変化があると言われている（渡邊，2013）。これらを考慮すると、青年期の子どもは、心身が不安定になったり、情緒的混乱にも陥りやすいと考えられる。子どもは児童期とは違った問題や悩みを抱えているが、親は児童期のときと同様に、子どもとの関わりをもち続けることも少なくない。このようなことから、青年期の子どもは、不安や悩み、ストレスを抱えることが考えられる。そして、子どもはそれらの発散の矛先を親に向ける可能性もある。すなわち、親子間の葛藤や衝突が出現する。

青年期の親子間葛藤についての研究は、これまで欧米では盛んに行われてきている。しかし、日本ではあまり行われていない。上記のように、青年期の子どもが抱える問題や悩みは多様で、親との葛藤が生じる可能性は高いと思われる。したがって、日本でも青年期の親子間葛藤の研究は必要であろう。

これまでの青年期の親子間葛藤の研究について記述する。

青年期の親子間葛藤の変化について、子どもの発達（年齢）による親子間葛藤の頻度は、青年期前期が最も多く、その後減少すると言われている（Laursen, Coy, & Collins,1998）。また親子間葛藤の強度については、青年期前期より中期の方が強いと言われている（Laursen, Coy, & Collins,1998; Goede, Branje, & Meeus,2009; Jensen-Campbell & Graziano,2000）。これらは、子どもの発達段階による親子間葛藤の変化について述べている。

次に、青年期の親子間葛藤の内容について述べる。Prinz, Foster, Kent, & O' Leary (1979) は Robin (1975) が作成した 44 項目のチェックリストを用いて、親子間葛藤を測定している。その内容は、きょうだいケンカをすること、宿題をすること、起床、自分の部屋を掃除すること、衣服を片づけること、うそをつくこと、成績が悪いことなどである。このリストを用いて、これまでに多くの研究が行われている（Riesch, Bush, Nelson, Ohm, Portz, Abell, Wightman, & Jenkins,2000 など）。しかし、文化により親の養育態度や教育制度、生活慣習などの環境には相違があり、親子間葛藤も文化によって相違が考えられる。

次に、青年期の親子間葛藤と関連要因について述べる。Steeger & Gondoli (2013) は親子間葛藤と親の養育態度、子どもの攻撃行動の縦断的調査を実施して、相互関連について報告している。これは、親子間葛藤が生起する要因と影響を及ぼす要因を明らかにしている。親子間葛藤が及ぼす影響については、Dekovic (1999) が、親子間葛藤は子どもの抑うつや自尊感情に影響を及ぼしていること、Ary, Duncan, Biglan, Metzler, Noell & Smolkowski (1999) が、親子間葛藤は子どもの学業成績や情緒的問題、性的行動に影響を及ぼしていることを報告している。これらは、親子間葛藤が子どもの心理的適応に悪い影響を及ぼしていることを示唆している。また、同時点間での影響や縦断調査によって翌年度や2年後の影響を検討している。しかし、青年期前期や中期の親子間葛藤が青年期後期にどのような影響を及ぼしているのか検討していない。青年期前期と中期の親子間葛藤を乗り越えて、青年期後期に達したとき、親に対してどのような感情をもっているのか検討する必要があるだろう。

そこで、本研究は青年期の親子間葛藤の変化、強度、内容について検討する。また、青年期後期の親に対する感情について検討する。方法として、大学生に、中学生、高校生、大学生の各時期の親子間葛藤について回想させ、面接調査を用いて葛藤の内容や現在の親に対する感情について尋ねる。

Ⅱ 方法

1. 面接調査時期：2013年10月～12月
2. 面接対象者：大学生30名（男性13名、女性17名）、平均年齢18.8歳
3. 面接時間：20分～40分（平均時間27分）
4. 面接方法と内容：心理学を受講する180名に対して、自由記述により、中学生、高校生、大学生のときの各時期に親とどのような葛藤や衝突があったか尋ねた。その際、この内容について、個別面接を行ってもよい人は、その曜日と時間を記述した。個別面接の許可を得た学生は30名であった。面接は大学の研究室で実施した。

面接は、授業時に記述した内容にそって、半構造化面接を行った。内容は、①家族構成、年齢、現在の住居を尋ねた。②中学生、高校生、大学生（現在の各時期で、親とどのような葛藤や衝突があったか尋ねた。③最も葛藤や衝突が激しかった時期を尋ねた。④現在、親にどのような感情をもっているのか尋ねた。

5. 倫理的配慮：面接における各質問に対して、回答したくないことは回答しなくてもよいこと、また回答内容については分析し、一切個人を特定することはないことを伝えた。

Ⅲ 結果・考察

1. 中学生、高校生、大学生の各時期の葛藤・衝突内容

面接調査で得られた中学生、高校生、大学生の各時期の葛藤・衝突内容をKJ法により分析した（Table1）。その結果、第1段階では、〈学校・学習〉と〈家庭〉に分類された。第2段階では、〈学校・学習〉のカテゴリーを〈学校生活〉と〈勉強〉、〈家庭〉のカテゴリーを〈家庭での生活〉と〈家族〉に分

類した。第3段階では、＜学校生活＞を【部活動】と【不登校】、＜勉強＞を【日常の勉強】と【受験・進路】に分類した。家庭での生活を【起床】と【門限】と【習い事】と【部屋の片づけ】と【全般的】、＜家族＞を【夫婦問題】と【きょうだい】に分類した。

KJ法によって分析した各カテゴリーの内容について述べる。「ひざをケガし、母親に部活動を辞めるように言われた。しかし部活動を続けていたため、母親と衝突した。」など、部活動に関して親との葛藤や衝突があった。【部活動】とした。「不登校になり、父親が学校に行くようにきつく言ってきたので、ケンカになった。時には殴りあいになった。」で、特異な事例ではあるが、子どもの問題に親の意見や考えを押し付けたことにより、親との衝突が生じた。【不登校】とした。

「母親が塾や学校での成績などを他人と比較して、色々と言ってきた。成績が20番以内だと何も言わないが、成績が良くないとグチグチ言ってきた。常に結果で判断されていた。」など、日常の勉強や学校の成績について、親との葛藤や衝突があった。【日常の勉強】とした。「受験勉強をしなくて、毎日母親から勉強するように言われ、イライラした。」など、受験勉強のことや高校・大学の進路決定で親と意見が合わなくて、親との葛藤や衝突があった。【受験・進路】とした。

「部活動の試合のときに、母親が朝起こしてくれなかったので、母親の責任にして、文句を言った。」など、起床の時間について親との衝突があった。【起床】とした。「17時が門限で、17時30分に帰宅したら、母親に叱られた。帰宅時間のことで何度も衝突した。」など、門限が決まっており、何かの理由で門限に間に合わなかったときに、親との衝突や葛藤があった。【門限】とした。また、男性は親との葛藤や衝突が全くなく、すべてが女性であった。「高校受験時にバレエの試合に出場しなくなかったので、母親と衝突した。」で、習い事において親子の意見の相違があり葛藤や衝突があった。【習い事】とした。「自分の部屋を片づけなかったため、片づけるようにしつこく言われた。腹がたった。」など、親に部屋を片づけるように言われたが、親を無視して、そのままの状態にしておいた。または後で片づけようと思っていた。部屋の片づけにつ

いて、親子の意見や考えの相違があり、葛藤や衝突が生じた。【部屋の片づけ】とした。「ご飯や入浴の時間のことを毎日のように言われた。」など、生活全般について親は子どもに指図をしてくる。子どもはそのような親の言動にイライラして、親との衝突や葛藤があった。【全般的】とした。

「親が再婚することを、私のためと言って理由づけしてきた。」で、特異な事例ではあるが、夫婦の問題を子どもの責任にすり替えることに対して、親との葛藤や衝突があった。【夫婦問題】とした。「きょうだいにより、母親の態度が違うことに腹がたった。」で、きょうだいによって、または場面によって、母親の子どもに対する態度が違い、それが子どもの親への葛藤や衝突を生じさせる要因になった。【きょうだい】とした。

Robin (1975) が作成したチェックリストでは、「自分の部屋の掃除」、「家事の手伝い」、「きょうだいケンカ」、「衣服の片づけ」、「宿題をすること」、「就寝時間」、「テレビを見る時間」、「成績」などが挙げられており、またこれらの項目は11歳から14歳までの子どもと親との葛藤の上位を占めている (Reisch, Bush, Nelson, Ohm, Portz, Abell, Wightman, & Jenkins, 2000)。【日常の勉強】、【起床】、【部屋の片づけ】は共通している項目であるが、【門限】、【部活動】、【受験・進路】、【習い事】は、このリストには含まれていなかった。これらの項目は日本の親子間葛藤の特有なものと考えられ、文化差があることが推察される。

次に、中学生、高校生、大学生での葛藤数（語り）や葛藤内容の変化について検討した。全体の葛藤数（語り）は中学生のときが27、高校生のときが19、大学生のときが5であった。子どもの成長・発達とともに葛藤数が減少していたことは、欧米の先行研究と同様であった。しかし、本研究は大学生が回想して葛藤を語っており、単純には比較検討できないと考えられる。また調査協力者の中には、現在一人暮らしをしている大学生もおり、一概に比較できないと思われる。

特徴のあるカテゴリーとその変化に関しては、【部活動】では、中学生のときが3、高校生と大学生のときの語りはなかった。【不登校】については、中学生のときが1、高校生と大学生のときの語りはなかった。部活動に所属する

ことは、中学生になって初めての人が多く、子どもは部活動での人間関係などの問題や悩みが生じやすい。そこで子どもと親との意見や考えの相違が生じて、葛藤や衝突が生じていると思われる。また高校生になると、部活動に所属している人が中学生と比較すると減少していることや、部活動の帰属意識も中学生より高校生の方が強いことが考えられるため、高校生のときには語りがなかったと推察される。

【日常の勉強】については、中学生のときが5、高校生のときが4であった。大学生のときは語りがなかった。親は中学生と高校生にとって、勉強することは非常に重要であると考え、中学生と高校生にとっては、勉強をできるだけ短時間で済ませたいとか、勉強は後でするからなど、勉強を親ほど重要と捉えていない可能性があるため、親子の葛藤や衝突が生じるのではないかと思われる。【受験・進路】については、中学生のときが2、高校生のときが6であった。大学生のときは語りがなかった。中学生のときは、受験についての語りであったが、高校生になると、将来の職業や受験についての語り为主であり、中学生と比較するとより具体的になってきていると思われる。

【門限】については、中学生と高校生のときが6、大学生のときが3であった。中学生、高校生、大学生と順に、門限が遅い時間になっており、親は子どもの成長とともに考え方を変化させていることが推察される。しかし、親は娘に対して、危機管理的な意識も強くもっており、管理的な養育になっているケースもある。【部屋の片づけ】について、葛藤数は中学生と高校生のときは2、大学生のときは1と少数であった。非常に身近で、目につきやすく、葛藤や衝突になりやすいケースと思われるが、あまりにも日常茶飯事なことであり、記憶にとどめにくいこととも考えられる。

2. 親子の葛藤・衝突が最も激しかった時期

親子の葛藤・衝突が最も激しかった時期(学年)について検討した(Table2)。その結果、中学生と回答した学生は21名(70%)いた。McGue, Elkins, Walden, & Iacono (2005) や Smetana, Daddis, & Chuang (2003) は、青年期前期より中期の方が葛藤が激しいと述べているが、本研究では中学生の方が

激しいという結果であった。本研究は面接調査による研究であるため、単純には比較検討はできないと思われる。今後は質問紙調査による量的な研究も実施する必要があるだろう。

また、親子の葛藤・衝突がなかった学生が2名（約7%）いた。細田（2008）は大学生を対象に、親に対して反抗があったかを尋ねたところ「なかった」と答える人が少なくなかったと述べている。また白井（2003）は1950年の調査論文を受けて、「昔の青年でもさほど親との葛藤がなかった」と考えられること、そしてその状況を踏まえて、「今日の青年が顕著に葛藤がなくなったということではないといえそうである」という見解を示している。これらから考えると、本研究で葛藤や衝突がなかったと回答した2名（約7%）というのは、少数だったともいえる。しかし、本研究では、親との葛藤や衝突がなかった人は、面接調査に参加する必要がないと考えていた学生もおり、少数になった可能性もある。

さらに、中学生から高校生にかけて、2年間以上も親との葛藤や衝突があった学生が11名（約37%）もいた。長期間の親との葛藤や衝突は子どもの心理的適応に影響を及ぼしていることが考えられる（Dekovic,1999）。本研究では、親子間の葛藤や衝突があった期間の心理的適応については、調査を行っていないため、今後は調査する必要があるだろう。

3. 家族構成（両親がいる家庭、母子家庭）による親子間葛藤

家族構成について、両親がいる家庭は24名（80%）、母子家庭は6名（20%）であった。両親がいる家庭と母子家庭の面接調査による回答を比較した。その結果、両親がいる家庭では、中学生のときは、親への反抗や衝突があったが、高校生になると、徐々に反抗や衝突が減少傾向であった。母子家庭の中には、中学生から大学生まで、門限のことや部屋の片づけなど、一貫して厳しい統制や管理を行う養育態度であり、変化がないといったケースもみられた。また、母親が日常生活で母親と父親の2つの役割をしていることが感じられた。白井（1997）は、母子家庭は比較的母親と仲が良いと述べているが、本研究は反対傾向が認められた。母親のパーソナリティも関連していることが考えられる

ため、今後は詳細な調査が必要だろう。

4. 現在の親に対する感情

現在の親に対する感情について、面接調査を行った結果、18名（60%）の学生が親に対して好意的な意見や気持ちを語っており、これまで育ててくれたことや大学に行かせてくれたことに対して感謝の気持ちや、親のような家族をもちたいという親を尊敬している気持ちを抱いていた。また、これらの学生の親との葛藤や衝突は、中学生や高校生のと看で終息しているか、葛藤や衝突が全くないという結果であった。反対に、親に対して否定的な感情を抱いていた学生は、中学生から大学生まで、親との葛藤や衝突が継続しており、「早く親と離れたい」、「親を恨んでいる」などの想いを語っていた。

次に、個別の事例における親への感情について述べる。

AさんとB君は、中学生のとき、自我の発達や友人関係、勉強、部活動などの問題を抱えており、日常の些細なことで、頻繁に親と衝突したり、親に対して反抗していた。しかし、高校生になると、友人関係や勉強のことなど、色々な問題が安定していき、親との衝突や親への反抗が消失していった。子どもは高校生になり、勉強などの物事に対する取り組みが変化したことにより、親は子どもの言動を認める頻度が多くなった。また子どもも親に対して、無理な言動や反抗的な態度をみせなくなっていた。すなわち、子どもの態度変化に応じて、親も子どもに対する態度が変化していき、また子どもも親に対する態度が変化していったと推察される。これらの親子関係は相互調整的に変化していったことが考えられる。このような親子関係になると、子どもは、大学生になって親に対して感謝の気持ちや尊敬の感情を抱くと思われる。

一方、Cさんは、Cさんの年齢（中学生、高校生、大学生）に関わらず、厳しい門限（時間）の制限や外泊禁止、外出の行動制限（外出場所や同行者名の連絡）など、母親はCさんに対して、一貫して厳しい統制・管理やプライバシーを侵すような養育態度であった。Cさんはこのような養育態度に対して、親に許可を得られるように何度も話し合いをもったが、聞き入れてもらえず、親と衝突したり、親に反抗をしていた。その結果、一刻も早く親から離れ

て生活したいという気持ちと、親に対して恨みを抱いていた。親は子どもの自立・自律を認めておらず、子どもより親は上の存在であると考えているように推察される。また、欧米では、親が子どもを心理的に統制することにより、親子間葛藤が生じるという研究（Steeger & Gondoli,2013）、また親が子どものプライバシーに侵入することにより、親子間葛藤が生じるという研究（Hawk, Keijsers, Hale, & Meeus,2009）があり、このケースも親子間葛藤が生じる一つの要因として、同様のことが考えられる。

これらより、親が子どもの成長・発達に応じて、養育態度を変化することは、子どもとの良好な関係を構築・維持したり、子どもの自立・自律や心理的適応を促進させると考えられる。

IV まとめと今後の課題

本研究は、大学生が中学生、高校生、大学生（現在）の親子間葛藤を回想して、各時期の親子間葛藤の内容、親子間葛藤が激しかった時期、現在の親への感情について、半構造化面接を用いて検討した。その結果、学校・学習のカテゴリーでは、部活動、不登校、日常の勉強、受験・進路に、家庭でのカテゴリーでは、起床、門限、習い事、部屋の片づけ、全般的、夫婦問題、きょうだいに分類された。葛藤数（語り）は、中学生のときが最も多く、次に高校生のとき、最も少なかったのは大学生のときであった。親への感情については、18名（60%）の学生は、親に対して感謝や尊敬の気持ちを抱いていた。これらの学生は、中学生のとき、または高校生のときに親子間葛藤はあったが、子どもの成長・発達とともに、親の養育態度が変化し、親子間葛藤が消失していた。

今後の課題について述べる。本研究は大学生が回想して、各時期の親子間葛藤を尋ねているために、中学生と高校生のときの記憶の不鮮明さが考えられる。今後は中学生と高校生を対象に親子間葛藤の調査を実施する必要があるだろう。また本研究は面接調査のため、調査対象者が少人数であった。今後は、質問紙調査を実施して、量的な調査も必要と思われる。

引用文献

- Ary,D.V., Duncan,T.E., Bigan,A., Metzler,C.W., Noell,W., & Smolkowski,K. (1999) . Development of adolescent problem behavior. *Journal of Abnormal Psychology*, 27, 141-150.
- Dekovic,M. (1999) . Parent-adolescent conflict: Possible determinants and consequences *International Journal of Behavioral Development*, 23, 977-1000.
- Goede,I., Branje,S., & Meeus,W. (2009) . Developmental changes in adolescents' perceptions of relationship with their parents. *Journal of Youth and Adolescence*, 38, 75-88.
- Hawk,S.T. & Keijsers,L., Hale,W.W., & Meeus,W. (2009) . Mind Your Own Business! Longitudinal relations between perceived privacy invasion and adolescent-parent conflict. *Journal of Family Psychology*, 23, 511-520.
- 細田憲一 (2008). 反抗期のない子は問題か－反抗期の意味を考える 児童心理, 1471-1475.
- Jensen-Campbell,L., & Graziano, W. (2000) . Beyond the school yard: Relationships as moderators of daily interpersonal conflict. *Personality and Social Psychology Bulletin*.
- Laursen,B., Coy,K.C., & Collins,W.A. (1998) . Reconsidering changes in parent-child conflict across adolescence: A meta-analysis. *Child Development*, 69, 817-832.
- McGue,M., Elkins,I., Walden,B., & Iacono,W.G. (2005) . Perception of the parent-adolescent relationship: A longitudinal investigation. *Developmental Psychology*, 41, 971-984.
- Prinz,R., Foster,S., Kent,R., & O'Leary,K. (1979) . Multivariate assessment of conflict in distressed and nondistressed mother-adolescent dyads. *Journal of Applied Behavioral Analysis*, 12, 691-700.
- Reisch,S.K., Bush,L., Nelson,C.J., Ohm,B., Portz,P.A., Abell,B., Wightman,M.R. & Jenkins,P. (2000) . Topics of conflict between parents and young adolescents. *Journal of the Society of Pediatric Nurses*, 5, 27-40.
- Robin,A.L. (1975) . *Communication training: An approach to problem solving for parents and adolescents*. Unpublished doctoral dissertation, State University of

大学生が回想した親子間葛藤（渡邊）

New York at Stony Brook. University Microfilm, Ann Arbor, MI.

白井利明（1997）. 青年心理学の観点からみた「第二反抗期」 心理科学, **19**, 9-24.

白井利明（2003）. 大人へのなりかた－青年心理学の視点から 新日本出版社

Smetana,J.G., Daddis,C., & Chuang,S.S. (2003) . “Clean your room!” A longitudinal investigation of adolescent-parent conflict resolution in middle-class African American families. *Journal of Adolescent Research*, **18**, 631-650.

Steeger,C.M., & Gondoli,D.M. (2013) . Mother-adolescent conflict as a mediator between adolescent problem behaviors and maternal psychological control. *Developmental Psychology*, **49**, 804-814.

渡邊賢二（2013）. 理想化した親の像が崩れるとき－変化していく子どもと親の関わり方－ 児童心理, 950-955.

大学生が回想した親子間葛藤（渡邊）

Table1 中学生、高校生、大学生の葛藤内容に関するKJ法の結果

カテゴリー		中学生	高校生	大学生
学校生活	部活動	足を骨折し、サッカーの試合に出場できなかった。骨折について父親は「おまえが悪い」と言って責めてきた。 サッカーのプレーや私生活についてグチグチ言ってきた。 なぎなた部に所属していた。車で迎えにくるため、遅くなると怒っていた。 剣道部に所属していた。ヘルニアになり、母親は部活を休むように言ってきた。自分としては休みたくなかったので、言い争いになった。 テニス部に所属していた。ひざをけがし、母親に部活をやめるように言われた。部活を続けていたため、母親と衝突した。		
	不登校	私立中学校の勉強が厳しく、ついていけなくなり、不登校になった。父親は学校に行くようにきつく言ってきたので、ケンカになった。時には殴りあいになった。家からでていくように言われたり、食事を与えてもらえないときもあった。		
学校・学習	日常的勉強	私の成績を上げるために、母親は勉強を教えてくれた。わからない問題があると、上から目線で言ってきたので、腹がたち、言い合いになった。結局自分一人で勉強をすることになり、試験の結果、点数が悪いと母親に色々と言われた。言い返すことはできなかった。試験のたびにこのようなことが繰り返り続いていた。	試験のとき、勉強するようによく言われた。特に高3のときは自分がイライラしていた。何か言われると反抗していた。	
		兄2人があまり勉強しなかったためか、父親は勉強するようにしつこく言ってきた。嫌だったが、無視すると怒るので、適当に返事をしていった。	高1のとき、試験勉強で夜中の2時、3時まで起きていると、叱られた。月に2回程度叱られ、非常にストレスを感じた。	
	勉強	母親は宿題や身なりなど、毎日のように確認してくる。あまりしつこいので、適当に聞き流した。話しかけず、そっとしておいてほしいと思っていた。 母親は塾や学校での成績を他人と比較して、色々と言ってきた。20番以内になるように言われた。20番以内だと何も言わないが、それより悪い成績だとグチグチ言ってきた。常に結果で判断された。腹が立った。 強制的に塾に行かされていたため、よくさぼった。さぼるのがばれると叱られた。食べ物が飛んでくるときもあった。自分が悪いので、反発することはできなかった。自分としては頑張っているのに、頑張っていないと言われたので反発していた。	ラグビー部に所属していた。帰宅時間が9時ごろになるときかたたびあった。帰宅後、疲れていたため、好きなネットをしていると、勉強するように母親によく言われた。言い返すことはできなかった。	
受験・進路	受験勉強をしなくて、母親から勉強するように何度も言われた。イライラした。	高1・高2のときも中学生と同様に、進路のことでよく衝突した。		
	受験高校を決定するとき、母親と希望校が違い、対立した。母親は世間体を気にしていた。母親が考えていた高校を受験し入学した。自分の意見を聞いてくれない。些細なことでもヒステリックになり、叫びてきたりした。毎日衝突していた。	卒業後、音楽系専門学校に行きたかったが、母親に反対され、行かせてもらえなかった。すこく腹がたつたが何も言えなかった。		
		希望する大学があったが、母親が経済的なことを言うので、県内の大学を受験した。仕方がなかった。 親は医者になってほしかった。模擬試験の結果を見せると、成績が芳しくなかったため、〇〇学科で納得してくれた。成績のことをグチグチ言ってきた。腹がたつたが、何も言えなかった。 〇〇大学と国立大を受験して、〇〇大学だけ合格した。父親は浪人をするように言ってきたが、本人は〇〇大学に入学したかった。しばらく大学のことで衝突したが、最終的には本人の意見を尊重してくれた。 英語の成績が悪く、この成績では国立大学は無理と母親に言われ、腹がたつた。事実であるため、言い返すことはできなかった。		

大学生が回想した親子間葛藤（渡邊）

カテゴリー		中学生	高校生	大学生	
家庭	家庭での生活	起床	起床について、部活の試合のときに起こしてくれなかった。母親の責任にした。よく衝突した。 学校が休日のとき10時ごろまで寝ていると、父親に叱られた。いい返しても、一般論で考えたらわかるだろうと言われ、何も言えなくなった。父親が自分に何か言うときは、椅子に座らされ、時にはたたかれるときもあった。非常にストレスを感じた。		
		門限	門限（18時）のことで何度も衝突した。 17時が門限で、17時30分に帰宅したら、怒られた。帰宅時間のことで衝突した。 部活をしていて、帰宅が遅くなって母親に叱られた。理由をきちんと説明しても理解してもらえなかった。 遊びに行く前に、誰・場所・帰宅時間を言って、出かけても何度も電話がかかってきた。電話にでると早く帰宅するようにグチグチ言われた。ケンカになったことも度々あった。	外出するときに、誰とどこで、何時に帰宅するのかしつこく聞かれた。許可を得ないとダメだし、面倒だった。 友人と夜遅くまで遊んでいて、何度も叱られた。	外出時、昼夜に関わらず、誰・場所・帰宅時間を言って、許可を得ていた。ずっと管理されている。 22時に帰宅したら、家に入れてもらえなかった。ケンカして友人宅に外泊したこともある。束縛がきつい。
		門限	部活が休みのとき、友人と遊びに行き、帰宅が10時になって、母親に叱られた。 母子家庭である。母親は門限に厳しく、9時までに帰宅しないと罰を与えられた。	連絡をせずに夜遅くまで遊んでいて、帰宅後叱られたときがあった。口論になったが、最終的には無視して自分の部屋にいて寝た。 22時が門限。22時より1分でも遅れると1000円の罰金を支払わなければならない。外出は承諾が必要であり、友人と食事をすると言っても理解してくれなかった。友人宅に泊まるとしても許可はもらえなかった。	何度言っても外泊を許してくれない。腹がたった。
		習い事	高校受験時、バレーの試合に出場したくないので、母親と衝突した。		
		部屋の片づけ	部屋の片づけについて、しつこく言われた。腹がたった。 父親の言ったことを無視したとき、炊事、洗濯、弁当作りなど自分でするように、罰を与えられた。1週間ぐらい続き、父親が反省しているか尋ねてきて、本人が謝罪すると、許してくれた。腹は立ったが、仕方がなかった。	部屋が片づけられなくて、探し物をしていると、母親からグチグチ言われた。反対に、母親自身にそのようなことがあっても、知らないふりをする。中学生のときより片づけのことを言われるのは減少した。 部屋の片づけをしないと、母親が入ってきて掃除をする。自分が置いていたものがなくなると、母親に怒る。しかし片づけをしない自分が悪いと言われる。言い合いになる。そのようなことが何度もあった。	部屋の片づけなど、何かにつけてグチグチ言ってくる。
		全般的	ご飯や風呂の時間のことを毎日のように言われていた。返事はあまりしなかった。自分の行動に介入してはしくなかった。親が何か言うとき反抗していた。とにかく話さなかった。	母子家庭のため、家事をすることが約東事になっている。食器洗いや風呂掃除を忘れてしまうとよく叱られた。	
		夫婦問題	中2のとき、母親は再婚すると言い、私のためと言って理由つけた。離婚をしても、父親は一人だけと思っており、イライラしたり、腹がたった。		
		きょうだい	母親の自分に対する態度と妹に対する態度に相違があった。母親はその場で都合のよい言葉を使っている。腹がたった。		

大学生が回想した親子間葛藤（渡邊）

Table2 親子間葛藤が最も激しかった時期

	人数	%
中学1年	2	6.7%
中学2年	5	16.7%
中学3年	5	16.7%
中1～中2	1	3.3%
中1～中3	6	20.0%
中2～中3	2	6.7%
高校1年	1	3.3%
高校2年	3	10.0%
高校3年	1	3.3%
中2～高2	1	3.3%
高2～高3	1	3.3%
なし	2	6.7%